■日本燃焼学会創立50周年記念特集■
再録：燃焼研究 109 号 (1997) 5-6

日本燃焼シンポジウムの生い立ち

日本燃焼学会名誉会員　辻　廣

日本機械学会は今年，創立 100 周年を迎え，記念祝賀会を初めいろいろな行事が企画されているが，その一環として記念出版物「機械工学 100 年のあゆみ」の出版が予定されている．昨年 9 月，この記念出版物の中で「熱工学のあゆみ」の執筆担当者である東工大の越後亮三教授から電話をいただき，第 1 回燃焼シンポジウムが 1963 年 (昭和 38 年) に開催されたことの確認を求められた．また本年 4 月，この記念出版物の記事の中の「燃燃工学の 100 年」という節の執筆担当者である阪大の高城敏美教授からも同じような問い合わせをいただいた．そこで手元にある資料を再調査し，かつ小生の記憶をもとに，日本で燃焼シンポジウムが開催されるようになった経緯をまとめ，高城教授に報告したところ，日本燃焼学会編集委員会もこの問題に関心を示し，同委員会から日本燃焼シンポジウムの生い立ちについての原稿を提出するようにとの依頼をいただいたので，簡単にこの経緯を報告する．

燃焼シンポジウムは，1965 年 (昭和 40 年) 12 月に日本化学会講堂で開催された第 3 回燃焼シンポジウムから，今日，第何回燃焼シンポジウムと呼ばれている正式の名称になり，かつ第何回燃焼シンポジウム前刷集が発行されるようになった．したがって第 1 回，第 2 回燃焼シンポジウムという名称のシンポジウムは開催されておらず，この間の事情を調べてみると，1963 年 (昭和 38 年) 12 月に，日本化学会講堂で，第 10 回国際燃焼シンポジウム提出論文発表会を兼ねて，日本燃焼研究会燃焼シンポジウムという名称のシンポジウムが開催されており，12 篇の論文が発表されている (発表論文の概要が「燃焼研究」第 6 号，1964 年 4 月発行，pp.57-84 に，昭和 38 年度燃焼シンポジウム発表論文概要として掲載されている)．引き続き 1964 年 (昭和 39 年) 12 月に，日本化学会講堂で，日本燃焼研究会，日本化学会，日本機械学会共催の燃焼シンポジウムが開催され，21 篇の論文が発表されている (発表論文の一覧表が「燃焼研究」第 9 号，pp.45-46 に，昭和 39 年度燃焼シンポジウム発表論文一覧表として掲載されている)．なおこのシンポジウムから日本機械学会が積極的に参加するようになり，同学会の燃料・燃焼部門企画，日本燃焼研究会，日本化学会共催として，この燃焼シンポジウムのプログラムが日本機械学会誌に掲載され，かつ同学会の尽力で発表論文の前刷集が印刷発行されており，今日の燃焼シンポジウムの形式がこの時期に確立されたことになる．1965 年から，日本学術会議燃焼研究連絡委員会が委員会の職務として，燃焼シンポジウムの企画，開催に深く係わるようになり，シンポジウムに明確な名称をつける必要が生じてきた．そこで関係者でいろいろ検討を行った結果，1963 年，1964 年に開催されたシンポジウムをそれぞれ第 1 回燃焼シンポジウム，第 2 回燃焼シンポジウムと読み替えて，1965 年に開催されるシンポジウムを第 3 回燃焼シンポジウムという名称にすることの合意が得られたようで，以降，この命名方式で燃焼シンポジウムが継承されてきている．このことは，1928 年，1937 年にアメリカで開催された燃焼のシンポジウムを，第 2 次大戦後になって，それぞれ第 1 回燃焼シンポジウム，第 2 回燃焼シンポジウムと呼称されるようになったのと同じプロセスを踏襲したことなる[1]．

昨年，越後教授から問い合わせがあったとき，「1961 年に第 1 回，1963 年に第 2 回，1965 年に第 3 回のシンポジウムが開催され，以後，毎年開催されるようになった」と返事をしたが[2]，日本で燃焼シンポジウムが開催されるようになった起源を振り返ってみると，1960 年に開催された第 8 回国際燃燃シンポジウムに提出する論文に対する国内での討論会 (1959 年 12 月，学士会館別館で開催) に始まっていることに気がつく．当時，国際燃焼シンポジウムで発表される日本からの申込論文は数篇に過ぎなかったが，これらの研究論文について，予め国内の燃焼研究者に情報公開し，有用な討論を受けておいたほうがよいのではないかという当時の日本燃焼研究会会長の矢木栄教授のご意向で，この討論会が開催された．この討論会に予期以上の多くの会員が出席し，非常に好評であり，次回以降の国際燃焼シンポジウムに対しても実施して欲しいとの希望も多かったので，1962 年の第 9 回国際燃焼シンポジウムに提出する論文に対する国内での公開討論会を，日本における最初の燃焼シンポジウムと位置づけ，1964 年の第 10 回国際燃焼シンポジウムに提出する論文に対する国内での討論会 (1963 年 12 月開催予定) を第 2 回の燃焼シンポジウムにしようとする計画が考えられていた．事実，第 9 回国際燃焼

シンポジウム提出論文発表会が，予定より1カ月余り遅れたが，1962年1月に日本化学会講堂で開催され，前回よりもさらに多くの会員が出席し，活発な討論，質疑応答が行われ，このような講演討論会に多大の関心がもたれるようになった．その結果，このような講演討論会を，国際燃焼シンポジウム提出論文発表会に限定することなく，一般会員の研究論文発表の場にして欲しいとの要望が強くなり，次回の講演討論会は，第10回国際燃焼シンポジウム提出論文発表会を兼ねて，1963年12月に日本燃焼研究会昭和38年度燃焼シンポジウムと命名されて開催されている．日本の燃焼シンポジウムが年末の12月に主として開催されるようになったのは，論文の国際燃焼シンポジウム提出期限から逆算して決められたのは間違いのない事実で，日本の燃焼シンポジウムの生い立ちに，国際燃焼シンポジウムの開催が密接に関連していたことが窺われる．

以上のような経緯で，第1回燃焼シンポジウム，第2回燃焼シンポジウムという名称のシンポジウムが存在していないので，第1回を1961年にとるか，1963年にとるかは意見の分かれるところであるが，今となっては．存在する文献や資料などからみて，既に指摘したように，1963年にとったほうがよさそうである．

この度，越後教授，高城教授の問題提起により再調査を行い，現在，毎年盛況に開催されている日本の燃焼シンポジウムの生い立ちを明かにすることができた．なお本文を纏めるにあたり，昭和39年に開催された「燃焼シンポジウム」に関する貴重な資料（日本機械学会誌に掲載されたプログラムおよび前刷集）を提供していただいた拓殖大学の堀守雄教授に厚く御礼申し上げます．

参考文献

(1) Third Symposium on Combustion and Flame and Explosion Phenomena, Williams & Wilkins, Baltimore (1949).

(2) 辻 廣，戦後の燃焼研究の歩み，災害の研究，第13巻，日本損害保険協会災害科学研究会編 (1982)， pp.149-157.